P-346

多病床におけるカーテンの使用状況と患者・看護師間の意識の違い

大分赤十字病院　看護部
○西山　友美、工藤　英美

はじめに：病院の多病床においてベッド間の仕切りはカーテン1枚だけであり、カーテンはプライバシー保護と快適な個人空間を確保するために必要不可欠となっている。しかし日頃のケアの中でケアを受ける側の患者と提供する側の看護師は、カーテンの使用状況でプライバシー保護や個人空間の確保をどのように意識しているのか疑問に感じていた為調査を行った。その結果両者に差が見られたので報告する。
目的：看護師と患者のカーテン開閉に対する意識を明らかにする。
方法：調査対象の患者・看護師に自己記入式質問紙調査。藤島の文献を参考に、カーテンを開ける場面7項目、カーテンを閉める場面9項目から構成される質問紙を作成、マン・ホイットニのU検定を行った。
結果・考察：カーテンを閉める場合において【読み書きしているとき】【排泄しているとき】【一人で過ごしたいとき】において両者に差がみられた。特に【読み書きしているとき】では患者はより「カーテンを閉めたい」と感じていた。看護師は看護・医療の現場において患者の安全を考え観察を目的にカーテンを開ける傾向にあるが、患者は安全のためだけでなく生活の場として捉えている為だと考える。今後看護師は、【読み書きしているとき】も患者のプライバシー保護、個人空間の確保ができるように配慮する必要がある。
まとめ：患者・看護師間では、カーテンを開ける場面において【面会者と気楽に話ができる】、カーテンを閉める場面において【読み書きしているとき】【排泄しているとき】【一人で過ごしたいとき】で意識に違いがある。

P-347

看護部部署課題成果発表　3年間の取り組みー看護部係長による取り組みー

柏原赤十字病院　看護部
○荻野　直美、松山　治美、大地　美和、足立　亮子、伊勢ゆかり、大久保真理、寺村　玲子、板谷　千春、雛倉　恵美

当院は、兵庫県の中南部に位置し、105床の小規模病院であるが、訪問看護ステーション、健診センターを有し、住民が住みなれた環境で生活できるよう地域に密着した医療提供を行っている。看護部では、各部署の目標に沿った取り組みや看護活動を共有するために、看護職全員を対象とした部署成果発表会を企画、さらに他部門にも参加を呼びかけ、看護部の活動を共有する手段としている。その運営責任者を看護係長会が担い、初年度から部署成果発表の運営及び各部署の目標達成に向けて支援を行なった。3年間経過し、多職種協働についてよい影響を及ぼしているため、その取り組みについて報告する。看護部部署成果発表のねらいは、１）他部署の現状や取り組みを知り、お互いが良い影響力を発揮できる。２）様々な職種と連携し看護を行っていく中で、他職種に向けて看護部の取り組みを見える化するの2点である。また、各部署の看護係長は、スタッフが主体的に行えるよう補佐し、部署成果発表へと支援している。　成果発表までの過程は、年度初めに各部署成果目標をプレゼンテーションし、中間評価時期に進捗状況を他部署とディスカッションする場を設け、計画の修正を行う。年度末に、各部署が1年間の成果をまとめ発表するという方法を取っている。　3年間の取り組みを終え、自らの取り組みを他者にアピールすることで、目標に向けてより積極的に取り組むことができた。そして、その取り組みが他職種と共通の目的を持っている場合、課題を共有することで他職種の役割が明確になり、患者中心の多職種協働の体制を築くきっかけになった。

P-348

当院のモジュール型継続受け持ち方式の変法の検討

名古屋第一赤十字病院　看護部
○山田　美穂、桑原　典子、矢野　初美、阿部佳代子、園田　玲子

当院は、平成5年よりモジュール型継続受け持ち方式の看護方式を実施しているが、三次救急病院として、在院日数の短縮、７：１体制による看護師若年齢層の増加などに対応する看護方式を検討するために、昨年より看護方式プロジェクトを立ち上げた。
目的：現行の看護方式の問題を把握し、基本方針に沿った看護方式を検討する。
方法：平成5年から使用しているモジュール型継続受け持ち方式のマニュアルに沿って、組織図に基づいた配置・役割の達成度・運用の現状についてアンケートを実施する。その結果をもとにマニュアルを改訂する。
結果：組織図に基づいた配置は、75%ができていた。役割の達成度は、コーディネーター77%、担当看護師27%、副担当看護師14%ができていると答えた。運用の現状については、運用上工夫している点としては、当日受け持ち看護師のケア度を考慮した受け持ち患者の割り振り、コーディネーターの役割が担えるような業務調整、経験を考慮した看護師のペアリング、受け持ち看護師をサポートする看護師を充てるなどであった。運用上の問題点は、短期入院患者の担当看護師や副担当看護師の役割が不明確、経験年数の浅い看護師がコーディネーターの時のサポート体制が不十分などがあげられた。　平均経験年数の低下している中でもプライマリーを重んじ、モジュール型継続受け持ち方式で達成感を感じることができるように変法することを考えた。係長2人体制になったことで、コーディネーターのサポートを充実させること、業務内容によっては当日受け持ち患者を持たない看護師を設置してもよい、短期入院患者は副担当看護師をつけなくてもよいなどの改正点を加えた。

P-349

療養病棟におけるパンフレット改訂の取り組み～TQM活動を通じて～

栗山赤十字病院　看護部
○國田　由美、角屋　愛美、高尾　沙耶、神戸あすか、刀根いずみ、長谷川恵子

【目的】当院は平成22年7月、経営改善を目指した病棟編成により3病棟中2病棟が療養病棟となった。病棟編成後1年、パンフレット（以下パンフとす）が活字ばかりで読みにくく、パンフの存在を知らない看護師もいる現状を知った。パンフが解り易くなり、更に療養病棟への理解を深める事で患者・家族が安心して入院でき、入院希望が増えることで病院経営にも貢献できると考えＴＱＭ活動に取り組んだ。
【方法】1. 平成23年7月～12月一般病棟21名と療養病棟13名の看護師を対象に自由記述・3段階で療養病棟に関する知識と理解度を調査するアンケートを実施。2. パンフを写真やイラスト付きで更に理解し易い文章とし、内容を一部追加し改訂。3. 改訂版パンフを2か月間使用し、改訂前と同様のアンケートを実施。前後で理解度の変化を単純集計で比較検討。
【結果】改訂前と比較して一般病棟ではアメニティ、料金システムについて「知っている」と回答した看護師は45%増加した。一方、「理解できていない」・無回答は38%という結果であった。又、療養病棟では理解が得られており、前後の差はなかった。改訂前後で患者・家族に療養入院の説明をした・療養についての質問を受けた看護師は一般・療養病棟ともに1～2名程度であったが、写真付きで分かりやすい・説明しやすくなった等の回答が得られた。
【考察および結論】パンフ改訂により療養病棟が理解された傾向を示したが、38%の一般病棟の看護師は「理解できていない」・無回答であり日頃の療養のアピール不足、転科時にパンフ使用の機会が少なかった事が考えられる。今後もパンフを使用しその効果を検討すると共に現状把握・改善に取り組み、療養病棟の理解が深まるようアプローチしていく必要がある。